

水にひたして、いでゐたるもおかし麗景殿御後朱雀女藤原延子もおりくの裝束おかしう細どにて、ことびはひきあはせて、殿上人などもの誦しなどしてあそぶ、五日、加賀左衛門、一品宮皇女章子後一條のいではに、

たもとにはいかでかくらむあやめぐさなれたる人のそぞゆかしきといひたりければ、いではのべん、

へだてなく玄らせやせましこ、のへのおろかならぬにかくるあやめを

〔枕草子三〕せちは五月に玄くはなし。略中御せくまいり、わかき人々はさうぶのさしぐしさしものいみつけなどして、さまぐからぎぬ、かざみ、ながきね、おかしきおりえだども、むらごのくみして、むすびつけなど玄たるめづらしういふべき事ならねど、いとおかし、

〔日本歲時記五月〕今日○五婦人女子たはぶれに菖蒲を頭上に插み、又腰にまとぶ、如此すれば病を除くと、俗にいびならはせり、歲時雜記に端午の日、菖蒲艾を割て、小き人形に作り、又は葫蘆の形のごとくし、これを帶れば邪氣を辟と記せり、かゝる遺俗にや、

〔萬葉集三〕同石田王卒之時、山前王哀傷作歌一首、

角障經、石村之道乎、朝不離將歸人乃念乍、通計萬四波霍公鳥鳴五月者菖蒲花橘乎玉爾貫貫交、二云カツラフ

爾將爲登○下

〔萬葉集十〕詠鳥

霍公鳥汝始音者、於吾欲得五月之珠爾交而將貫、

〔萬葉集十八〕國掾久米朝臣廣繩以天平二十年附朝集使入京、其事畢而天平感寶元年閏五月二十

七日、還到本任、仍長官之館設詩酒宴樂飯、於時主人守大伴宿禰家持作歌一首并短歌略中保止止支須、支奈久五月能安夜女具佐、餘母疑可豆良伎、左加美都伎、安蘇比奈具禮止○下